

2006年度EvCC海外研修とEvCC Tutoring Center

西崎 有多子

目 次

1. 2006年度 EvCC海外研修
 - (1) 今回の研修の特徴
 - (2) 事前研修と事後研修
 - (3) NBIでの授業
 - (4) 学外見学
 - (5) ホストファミリー
 - (6) サンフランシスコ見学
 - (7) 往路・復路
 - (8) 今後の研修について
2. EvCC Tutoring Center
 - (1) Tutoring Centerの概略
 - (2) センターの必要性
 - (3) ハンドアウトの充実
 - (4) チューターの育成
 - (5) 独自のコンピュータ・プログラム

1. 2006年度 EvCC海外研修

(1) 今回の研修の特徴

2007年3月3日～19日の日程で、2006年度春季EvCC海外研修が行われた。今回の研修は、EvCCにおける前回（2005年度・春季）と前々回（2003年度・冬季）に比べ、いくつか異なる特徴があった。

過去の短期研修においては、国際交流委員会方針として、最低催行人数を10名以上、そのうち本学学生5名以上と決めていた。学生だけで

10名に満たない場合は社会人募集を行った上で、全体で10名以上の参加希望者が揃わない場合は、実施しないことになっていた。しかしながら、ここ数回の募集では学生の希望者が極端に少なく、参加を強く希望する学生が毎回応募しても研修自体がキャンセルになる事態が続いていた。そのため、教授会承認を得て、今回は参加希望者が今までの基準を下回っても学生が5名以上集まった場合は行うこととした。当初の希望者は6名であったが1名の辞退があり、かつ日程的に社会人募集が困難になったこともあり、学部生5名という小グループで行うこととなった。学生の内訳は、学部3年女子1名、同2年男子1名、同1年男子2名、同1年女子1名である。

これまでの研修と比べ、NBI (Nippon Business Institute) における授業時間が多く設定された。時期的には学期末の2週間にあたり、毎週水曜日の学外見学を除いて毎日規則正しく授業が行われた。その結果午前中は現地学生との合同授業を、午後は本学の学生のみでのESLの授業を落ち着いて受講することができ、とても成果が上がった。現地学生とのコミュニケーションも活発に行われ、クラスメートとして人間関係を構築することができたことは、学生にとって大きな収穫であった。

(2) 事前研修と事後研修

現地研修に加えて事前研修は2日間(3コマ)、帰国後の事後研修(1コマ)も行われた。

ホームステイのための英会話では、これまでの研修で西崎が同様の研修を行っている。しかし毎回時間がとても限られており、英語での現地対応に十分とは言える研修には至っていないのが現状である。今回は、入国関連、ホストファミリーとの初期の会話を中心に研修を行い、テキストの内容を確認、ホストファミリーにお願いするとき等の言い方の基本について何度も練習した。またホストファミリーとよい関係を築くための具体的なアドバイスも強調した。

事後研修では、まず、研修中に西崎が撮影した数百枚の写真をプロジェクターで紹介して実際の研修を出席者全員に見て頂いた後、5名の学生が、帰国後の興奮覚めやらぬ状況下で、それぞれ用意してきた研修レポートを堂々とかつ真剣に発表した。この日は、数日後に行われた本学の入学式参列のため来名中の、EvCC 副学長Dr. KerlinならびにNBI Director マユミ・ミスミス先生が同席して下さいました。このことは学生達にとっても大変うれしいことであり、お二人に感謝したい。学生たちのレポート発表を聞いて頂くことにより、今回の研修の成功を直に感じて頂くこともできたことは大きい。また、学内からは新学長予定者の山極教授をはじめ、数人の先生方が参加して下さいました。

(3) NBIでの授業

午前中は、現地の学生が履修中の「日本の文化と歴史」、「日本語102」、「日本語202」に参加した。ほとんど同年齢の学生達とはすぐに打ち解け、皆、毎日目を見張る成長ぶりであった。必要に迫られつつ身振り手振りも含めて、何とかコミュニケーションをとる努力を重ねていった。日々、簡単な対応で英語が口に出るように

なり、本学の学生同士披露しあって楽しんでいった。授業では現地学生と互いに日本語と英語を教えあいながら、与えられたテーマに取り組む授業形態で、これは双方の学生達にとって話す意欲と能力を同時に高めていくことが可能な、高く評価できるプログラムであった。最後に、与えられた表現を必ず取り入れて台本を書き、日本語英語の両方で寸劇を行うというプロジェクトが行われたが、和気あいあいの雰囲気の中、学生達の多くの工夫が感じられる楽しく忘れられないプレゼンテーションとなった。

午後は合計6回のESLの授業が行われた。アメリカでの生活上、切実に必要な内容の授業も多く、学生達は真剣そのものであった。おつりの数え方や地図の見方、小学校での読み聞かせの練習など、すぐに実践にすることができる状況下で、学生のやる気が満ち満ちていた。

現地研修のスケジュールは、毎日規則正しく行われ、総時間数は40.6時間に達した。本学の1コマ(90分)で見ると27コマ分に相当し、現地教員の成績評価とあわせて、後日単位認定の可否が判断されることになる。



写真1 現地学生との最終授業風景

(4) 学外見学

学外見学としては、当初の計画にはなかったエヴェレット市役所と警察署の見学が偶然が重

なって運良く行われた。市役所では突然の訪問のお願いにもかかわらず、広報部長のケイトさんから、港を見渡すことができる会議室で市の歴史と概略についての説明を受けた。ボランティアで同年代の学生が働いていて、彼女の仕事ぶりや将来への展望を聞き、学生達にとって大いに刺激になった。

ボーイング社の工場見学は、最大の楽しみにしていた学生もいて、世界最大の容積を持つ工場内で、一度にジャンボ機が何機も製造されているのを見るのは壮観であった。ただ、見学方法としては、高い階の一箇所から、説明を聞きながら見下ろすだけの単純なものであった。外の空港周辺には各航空会社が発注した製造過程の飛行機が並んでいて、テスト飛行を経て注文した会社のパイロットの操縦により納入されるとのことであった。見学は博物館を合わせて2時間弱で終了し、その後Alderwood Mallへ買い物に出かけた。初めてのモールでそれぞれお目当ての店を見つけて楽しく過ごした。

シアトル見学は、マユミ先生のご主人の案内で、Pike Place MarketやWestlake Mall周辺を回った。エヴェレットを離れて大都市の雰囲気味わい開放された気分であった。高台の公園からシアトルの高層ビル群をバックに、いつまでも写真を撮った。

(5) ホストファミリー

当初は男子学生3名が同じホストファミリーに配当されていたが、NBIにお願いした結果、非喫煙者の学生は単独で別のホストファミリーとなった。結果として喫煙者である1年の男子学生2名が同じホストファミリーに、あとの3名はそれぞれ一人ずつの滞在となった。今回は引率者も単独でホストファミリーに滞在した。

この研修では毎回同じであるが、NBIまでの送り迎えとランチの用意がホストファミリーと

の契約に含まれており、学生の登下校時の安全確保の面で万全であった。ランチについては、ほとんどの学生が、現地では典型的と思われるサンドイッチ、ポテトチップスの子袋、お菓子という3点セットを持たされ、中にはこの習慣に戸惑ったり、困っていた学生もいた。途中からホストファミリーと相談の上、内容を変えてもらったりした学生もいた。

どの学生もホストファミリーとは問題なく楽しく過ごすことができた。NBIとの関係が深いホストファミリーが多く、受け入れることに慣れている家庭がほとんどで、英語も話せず戸惑うことばかりの学生にとっては有り難いマッチングであった。言うまでもなく、ホストファミリーとのコミュニケーションを通して学生達はアメリカの生活や文化を大いに体験し、英語の練習と共にアメリカを体験することができた。辛抱強く接して頂いた家族の皆さんに感謝したい。

(6) サンフランシスコ見学

NBIでの研修を終了翌日、早朝出発したこともあり、学生たちの疲労はピークに達していた。シアトルの空港では、このままサンフランシスコを見学することなくセントレアに帰りたいと口々に言っていた。チェックインしたホテルでは、ドアに部屋番号も付いておらず、不安な気持ちに拍車がかかってしまった。しかし、ピア39やツインピークスなどを回り、ゴールデンゲートブリッジに到着した頃には霧も晴れ、美しい景色を前に来た甲斐があったと皆で喜んだ。ダウンタウンで下車し、チャイナタウンで楽しく夕食を食べ、翌日予定通りサンフランシスコを後にした。最後によい思い出がプラスされたと思う。

(7) 往路・復路

往路はセントレアからサンフランシスコへの機体に問題発生し、機材も離陸時刻も大幅に変更されての出発となった。サンフランシスコ空港での入国審査では、指紋押捺と写真撮影があり、着いたばかりのことでもあって緊張した。便の遅れにより、予定されていた乗り継ぎ便には乗れずに再予約となったが、数時間後の便しかなく、サンフランシスコ空港で長時間待たされることになった。現地の携帯電話をセントレアで入手してあったため、NBIや現地旅行社ともすぐに連絡が取れて助かった。飛行機の乗り継ぎでの到着方法は、遅延や変更があるとその後の予定に大きな問題が生じることを実感した。また、再予約も行列した後、便や席の希望を告げる必要があり手間がかかった。荷物は再予約後にチェックインしたが、結果として、学生のスーツケースが1個紛失、引率者のものは破損していることがシアトル空港到着後判明した。これに伴う申請手続きを空港で行う必要が生じ、NBIへの到着時刻は更に遅れ、NBIスタッフやホストファミリーに迷惑をかけてしまうことになった。

復路は、荷物が増えていたため、シアトル空港で国内線チェックインの際、6名中4名が重量制限オーバーで超過金を払わされた。翌日の国際線は制限も数が異なることとパッキングに工夫をしたため、全員がクリアできたが、最初から重量に対して正確な情報に基づいた注意をすべきであった。サンフランシスコで一泊したため、復路は同日の乗り継ぎではなかったこともあり、多少離陸が遅れたものの、予定通りに帰国することができた。

ただ、いずれも、機内持ち込み荷物の制限内容が3月から変更されたため、検査が毎回厳しかった。幸い長く待たされることはなかったが、時間に余裕を持って空港に到着することが肝心

である。また、検査よりもチェックインの行列に時間がかかることが多かった。

(8) 今後の研修について

EvCCにおける今後の研修について、今回の研修の経験を踏まえて、次のように提案する。

- ・実施時期は、春季で今回同様の時期が最適である。現地学生との合同授業が可能であり、夏季は他の研修と重複する可能性が高く、NBIとしても対応が難しくなる。
- ・現地学生との合同授業数を一定以上確保することはとても学生にとって有意義である。
- ・ホストファミリーは1人1軒ずつが理想ではあるが、そうでなくてもホストファミリー宅への滞在効果は十分に期待できる。
- ・現地への往復については、できるだけ直接シアトルに到着する便を利用するのが望ましい。乗り継ぎは問題が発生するとその対応が多岐にわたり様々な問題が生じてしまう。

2. EvCC Tutoring Center

(1) Tutoring Centerの概略

EvCCには、「Tutoring Center」（以下、センター略す）と呼ばれる総合的なラーニングサポートサービスを行うセンターがあることを知り、興味があったので、運営責任者であるMs. Wellmanにアポイントをとり、概略を伺うことができた。

センターでは、EvCCに履修登録をしているすべての学生を対象とし、無料の学力サポートを行っている。その方法には、予約制の個別指導、予約なしの随時指導（主に数学科目）、少人数指導、コンピュータサポート、ワークショップ等があり、学生は希望によりその中から自分に必要なサポートを選ぶことができる。

センターの目的は、学生の学習上のサポートにあり、教科書を使った勉強、試験準備と試験

後の対応、学習者の弱点の解消、自分自身で学習を進める方法を学び、学生同士のネットワークを作ること等とされている。一方センターでは、提出物のプルーフ・リーディング、自宅実施の試験、ラボレポートの手伝いや代筆などは行わない。

センターはレーニア・ホールと呼ばれる、主に英語の授業が行われる建物にあり、月曜日から木曜日は朝8時から夕方6時50分まで、金曜日は午後2時50分まで、土曜日は9時から正午まで開かれています。

スタッフはDirectorでもある専任の教員が1人、専任の専門職員が数名、非常勤（アルバイト）のチューターから成っている。チューターになるには、GPAが3.0以上で、教える対象となる科目の成績がAまたはBであったことが最低条件である。

Tutoring Centerに加えて Writing Centerもあり、両方をあわせて Learning Centerと呼ばれている。



写真2 レーニア・ホール

(2) センターの必要性

EvCCは、コミュニティカレッジであるので様々な学生が学んでいる。主に若い学生が多いが、始めから4年制大学へ進学できずに、まずここで2年かけて編入への準備のための学習を

する学生が多く存在する。学力が低く授業についていくのが困難な学生に対して、授業を補い、授業についていくことを可能にするためにセンターがその役割を担っている。また、生涯学習者としての学生にとっては、以前学んだことを忘れてしまっている学生が多く存在しており、彼らに対しても学習面のサポートが必要となる。

(3) ハンドアウトの充実

センターでは、数学科目に問題がある学生が最も多いため、数学関連のハンドアウトがたくさん用意されている。セルフチェック式による、数学科目の選び方や試験結果分析からみる自分の強みと弱点のを見つけ方、数学の試験勉強の計画の立て方などがある。数外以外の一般科目のテスト前のステップについて解説しているものもある。いずれも基本から丁寧に段階を追って身につけられるような工夫がなされている。

(4) チューターの育成

チューターは本人の希望により、基準を満たした学生が書類専攻や面接を経て採用されることになっている。トラブルを避けるため、まず同意書にサインをすることになっているが、他にもチューター評価書、担当する学生との同意書など、運営に必要とされる書類に多くサインをすることになる。他にチューター・トレーニングが頻繁に行われ、チューターの育成がはかられている。

(5) 独自のコンピュータ・プログラム

どの学生がいつどのチューターと学習し、その後成績はどのくらいあがったのかなどすべての情報は、EvCCが作り上げたコンピュータ・プログラムによって処理され、これにより全体を把握できるようになったとのことであった。

本学にもできることなら、このようなセンターの開設が望まれるところである。